

# Better Care

80

2018 Summer

夏

## 特集 多様な共生を目指す

▼生きやすさを保障する社会を

誰もが困窮に陥る可能性のある時代。

「生活保障」を地域に根付かせ

家族やコミュニティを支えなおそう

宮本 太郎 [中央大学法学部教授]

インタビュー：中澤まゆみ [ノンフィクションライター]

▼地域とともに生きる

「DAREDEMO」を実現する発想と

実行力が、全国発信を可能にする

社会福祉法人ゆうゆう

▼まるごとの暮らしを支える

半農半介護。複数の事業で絆をつむぎ

暮らしをまるごとケアする

高橋 和人 [特定非営利活動法人 里・つむぎ八幡平代表]

▼当事者を中心に

友だちだから、相手が認知症当事者でも

けんかもするし、割り勘で飲む

水野 隆史

[若年認知症いたばしの会ポニー事務局]

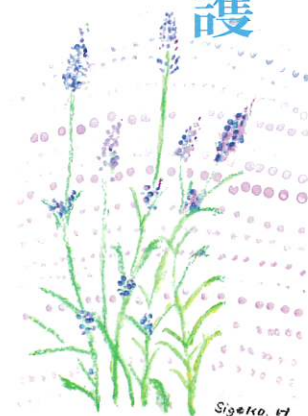


### 百人百色の介護

藤沢市 [神奈川県]

西桂町 [山梨県]

総社市 [岡山県]



### 鼎談

お客様のニーズに導かれ、  
「困った」を解決するお手伝い

池田 啓子 [株式会社特殊衣料代表取締役社長]

西谷 友和 [社会福祉法人ともに福祉会施設長]

浜田 きよ子 [高齢生活研究所所長]







木の香りも気持ちのいい「ぱんたれい」では午後の体操



里・つむぎでの体操。障害の人も高齢者もまるごとの日常



間もなく地域食堂として出発する「古民家ダイなつかしの家」には立派な神棚がある

まるごとの暮らしを支える



いちばん最初にできた「里・つむぎ」は、高橋さんの実家を改装した、暮らしの匂いのする家

半農半介護。複数の事業で絆をつむぎ暮らしをまるごとケアする

高橋 和人 [特定非営利活動法人 里・つむぎ八幡平代表]



お年寄りと話するとき、高橋さんの目はやさしい

次々と開設ラッシュ

岩手山を南に仰ぐ八幡平市。高齢者と障害者がともに生活する「共生」の場づくりと農業を組み合わせた「半農半介護」の取り組みをここで続けているのが、高橋和人さんが運営する「特定非営利活動法人（NPO法人）里・つむぎ八幡平」だ。

八幡平市は、盛岡市から自動車道で約40分。

岩手県のシンボル岩手山を南端に、西には秋田県との県境に広がる奥羽山脈の八幡平、北には前森山などの山々に囲まれ農業地帯が広がる。2005年に3町村が合併してできた市の人口は現在約2万6000人。高齢化率は37%を超え、数年後にはピークを迎えるという。

11年4月、高橋さんは認知症になった母を家で介護しようと、実家を改装して「宅老所 里・つむぎ」を開設した。以来、13年6月に空き家利用の「古民家ダイ なつかしの家」、14年4月に「全国でもまだ珍しい「共生型グループホーム 白山の里」の開設、15年11月に「住宅型有料老人ホーム ぱんたれい」、そして18年4月には「小規模多機能事業所 くるまっこ」をオープン。そのかたわら、別会社で空き家利用の「障がい者グループホーム すばる（18年7月より野駄の家に名称変更）」（女性専用）と、「すばる 農業部門」を立ち上げた。

地域の意識を変える

一見、順風満帆に見えるが、試行錯誤の連続だと、高橋さんは苦笑する。

「苦戦しています。就労継続支援B型をやってみただけで、仕事をうまく生み出すことができなかった。介護が必要になったら施設か病院に行く、という地域なので、在宅サービスの訪問介護の需要がほとんどなく、訪問介護事業所も失敗しました。住宅型有料老人ホームも2年間やりましたが、介護サービスが各人別々の時間

に入るため、入居者が一緒に食事に行くこともできない。この周辺は年金額が低い国民年金受給者が多いため、有料老人ホームは農村に合わないと思いい、12床中9床をグループホームに転換しました」

友人の実家だった空き家を利用して始めた女性専用の障害者のグループホームは、女性の入れる施設が地域にないという、市からの依頼がきっかけで始めたが補助は出ず、5人入らないと赤字なのに、まだ入居者は4人とあつて経営は苦しい。

岩手弁で「水車」を意味する「くるまっこ」と名づけられた、できたてホヤホヤの小規模多

機能事業所も、計画当初は展望台付きレストランなどを加えた複合施設を考えたが、建築基準や資金繰りが合わずあきらめた。その代り、岩手山が目の前に見える庭には、バーベキュースペースとピザ窯をつくる予定だ。

施設内の地域交流スペースでは、看護師が健康相談などを受ける「田園の保健室」や、映画会や講演会などのイベントを開いて、地元の人を対象にした認知症の人への「聞き書き講座」も、この秋から始める。家族会に向けての「認知症講座」も開き、田舎では依然として根強い認知症への偏見を、少しでも軽減できたらと考えている。

この夏には、3月いっぱい閉めた「古民家ダイ」を改装し、配食とワンコイン・ランチを提供する「地域食堂」をオープンする。一連の介護事業を始めてからしばらくは、「高橋の息子がボケた年寄りを集めて、金儲けしているらしい」と噂されていたのが、最近では「近くにつくってくれてありがたい」といわれるようになった。時間はかかるが、地元の人たちとの交流を広げ、意識を変えていくしかない、高橋さんはあくまでも前向きだ。

\*B型は、通常の事業所に雇用されること困難な就労経験のある障害のある方に対し、生産活動などの機会の提供、知識および能力の向上のために必要な訓練などを行うサービス。企業と雇用契約を結び就労を支援するのはA型。

心のバリアフリー

高橋さんが福祉の仕事をしたのは、40歳を超えてからのこと。盛岡市で経営していたインテリアの店が失敗。知り合いに誘われ社会福祉法人立ち上げに参加、その後、特別養護老人ホーム（特養）の事務長となっていたとき、八幡平の実家に住む母親が認知症になった。家に頻繁に戻り始めると、故郷の姿が大きく変わっていることに気がついた。農業の機械化とともに「結」の精神が薄れ、人の心が離れ離れになっていた。もともと、高橋さんの家は農家。それを継ぐのが嫌で飛び出した田舎だが、「なんとかできないか」と心が動いた。

特養で仕事をするうちに、施設の大規模ケアに疑問を感じるようになり、2年間考えた末、





プロの農家の遠藤さんたちが腕をふるう農業部隊



ネコもヤギも「里・つむぎ」のメンバー

◎特定非営利活動法人里・つむぎ八幡平

◎一般社団法人 すばる

〒192-0919  
 〒028-7112 岩手県八幡平市田頭12-94-1  
 TEL : 0195-75-2310  
 FAX : 0195-68-7733  
 理事長兼統括施設長：高橋和人

**農業で里をつむぐ**

「里・つむぎ」に隣接する「共生型グループホーム 白山の里」。その間にある作業場で、「農業部隊」を率いる遠藤一さんが、チェーンソーで木材を薪用に断裁していた。30年間続けてきた農業を「食っていけない」と断念し、スーパーで働いていたところ、高橋さんから「またやらなにか」と声をかけられたというが、実はふたりは幼馴染の従兄。

八幡平に戻った14年前から、いつかは農業をやらなければならぬと、高橋さんは考えていた。その〈里をつむぐ〉「半農半介護」構想が具体的に動き始めたのは、玉ねぎとニンニクを試験的に植えた2016年春から。1.3ヘクタール（4000坪）の稲田に植えた米に加え、さ

だしてから少しずつ変わってきた。すべての障害事業所から利用を断られ、今は「里・つむぎ」まで歩いて通う。「日中と夜間と場所が変わったのがよかったのかもしれない」と村上さんは思うが、母親の世代の認知症の高齢者とゆったりとおしゃべりができる、まったりとした「白山の里」や「里・つむぎ」の空間も、大きな影響を与えているようだ。とくに仲良しなのが90代のノブさん。同じ缶詰工場で働いていた共通体験があり、苦労話や楽しい思い出を繰り返して話合っているという。

共生型は、認知症の高齢者と、精神や知的障害者の両方が対象なので接し方のバリエーションが多く、ケアする側としては大変な面はあるが、ケアのやりかたの基本はそう変わらないと、もうひとりのスタッフの去石一さん。

「僕はここに来る前、『白山の里』に勤務していましたが、高齢者の生活の場に若い女性が入ると、雰囲気ガラリと若やくんです。精神の人が大声を出したりすることも刺激になる。昔の大家族のような感じですが、もちろん、びっくりして怒り出す高齢者もいますが、だんだん慣れてくるようですね」

生活感の漂う民家「里・つむぎ」では、高齢者と障害をもつ女性たちのお互いが気遣い合う空間が、さらに自然に醸し出されるようだ。セツコさんとノブさんがときおり笑い声を交えながら語り合う姿を見ながら、古い民家のもつチカラを感じた。

「農業は嫌だったが、また戻ってしまった」と遠藤さんはぼやくが、夢は「楽しい産業型農業」。いったんは農業から離れたふたりは、いま、再び土に呼ばれ、農業を福祉につながることをめざしている。ヤギをなでながら高橋さんはいふ。「ここが核となつて、新しいつながりをつくりだしていくのが、これからの自分の役割だと思えます。地域を変えていくのはよそ者、バカ者、Uターンしてきた若者とよくいわれますね。だから、ヘンなヤギがやるしかないだろうと（笑）」

（中澤まゆみ「フンフィクションライター」）



「くるまっこ」でのランチ。できる人はお手伝い

八幡平でNPOを立ち上げた。そのときにつくった「福祉を核とした心のバリアフリー」を理念とした10年計画の青写真は、「6割くらいは実現されているんじゃないかな」という。特養時代、読売新聞で目にした、障害児をもつ年長いた母親の「将来自分に介護が必要になったとき、子どもと一緒に暮らせる場はないのか」という嘆きの記事が、いつかは障害者も一緒に…という考えにつながった。

最初に立ち上げた宅老所に「里・つむぎ」と名づけたのは、ちいさな福祉の拠点がつながっていくことが、「里をつむいでいく」ことになると考えたから。16年からは「宅老所」に代わっ

て「まるごとケアの家」と名乗っている。制度の枠にとらわれず、さまざまなケアを、当たり前前の感覚で提供しながら地域をつくらせていきたい、というコンセプトに賛同したからだ。

看取りのできる場にした、という思いもごく自然に実現されてきた。「里・つむぎ」で3人、「白山の里」で6人、「ぱんたれい」で2人。高橋さんの母親を含め、11人がこの共生の場所から旅立っていった。

**高齢者も障害者もとせに過いす**

隣の「くるまっこ」で、野菜たっぷりのランチをいただいたあと、お昼寝の時間が終わった「里・つむぎ」を訪ねた。奥のソファで中年女性と高齢女性が楽しそうにおしゃべりしている。50代のセツコさんは統合失調症。隣の「共生型グループホーム 白山の里」に住み、日中はこの日中一時支援に通う。一緒に暮らしていた母親が認知症で施設に入ってしまったため、ひとり暮らしは無理と病院に2年半の措置入院後、1階に認知症高齢者9人、2階に障害者5人（女性専用）が住む「白山の里」に1年半前にやってきた。「白山の里」の生活支援員の村上町子さんによると、半年間は大変だったという。

「途中で固まってしまい、次の動作まで30分かかるんです。ご飯を食べるときも途中で固まってしまうので、病院では流動食。介助も難しいといわれていました」

そのセツコさんが、「里・つむぎ」と行き来し

「僕はこの前、『白山の里』に勤務していましたが、高齢者の生活の場に若い女性が入ると、雰囲気ガラリと若やくんです。精神の人が大声を出したりすることも刺激になる。昔の大家族のような感じですが、もちろん、びっくりして怒り出す高齢者もいますが、だんだん慣れてくるようですね」

生活感の漂う民家「里・つむぎ」では、高齢者と障害をもつ女性たちのお互いが気遣い合う空間が、さらに自然に醸し出されるようだ。セツコさんとノブさんがときおり笑い声を交えながら語り合う姿を見ながら、古い民家のもつチカラを感じた。

「農業は嫌だったが、また戻ってしまった」と遠藤さんはぼやくが、夢は「楽しい産業型農業」。いったんは農業から離れたふたりは、いま、再び土に呼ばれ、農業を福祉につながることをめざしている。ヤギをなでながら高橋さんはいふ。「ここが核となつて、新しいつながりをつくりだしていくのが、これからの自分の役割だと思えます。地域を変えていくのはよそ者、バカ者、Uターンしてきた若者とよくいわれますね。だから、ヘンなヤギがやるしかないだろうと（笑）」

（中澤まゆみ「フンフィクションライター」）